

潮

流

雪の言葉(下)

マタギのカエスキ



大友 義助

マタギのカエスキと言っても、ちょっと分からないかもしれないが、何のことはない、マタギは狩人のこと、カエスキは雪をかけた、屋根の雪降ろしに用いる雪べらのことである。

雪べらを何故カエスキと呼ぶかは、やや難問である。カエスキは元来は木鋤のことらしい。雪べらをコスキと呼び、木鋤の字を当てている地方は意外に多い。雪の名著「北越雪譜」もそうである。この書にはコスキの図が描かれ、その使い方も記されている。これを「カエスキ」とか「ケエスキ」「カイシキ」と呼ぶ地方もあるが、これは木鋤の訛った語と考えられる。

木製の鋤と言えば、これは弥生時代以来の最も基本的な農具である。鍬などよりもはるかに古い農具である。木鋤は元来は土を掘り返したり、砕いたりするのに用いられる道具であった。したがって当時の木鋤は現在の雪べらよりも細身で、丁度舟の櫂のように太く丈夫に作られていた。

マタギが持つカエスキは、現在雪の中で使っている雪べら(カエスキ)とは違って、まさにこのような形である。小生が初めてこれに接したのは、新庄市の北東の山手の集落

萩野においてである。古い農家が解体されるというので訪ねてみたら、屋根裏から何やら堅い木で作った丸太のようなものが出て来たので、主人に問うたところ、これは山に狩りに行くとき持って行くカエスキだという。長さ百四十センチ程、先の方は少し幅が広がって薄くなっているが、元の方の柄の部分は断面楕円形の直径十センチ程の丸太である。先の方約三十センチの部分はやや幅が広がり、厚い板状の短形の形であるが、その幅はせいぜい十五センチ程で、先の方がシャベル状に尖っている。小ぶりのカエスキというよりはむしろ、非常に丈夫な棒という感じである。持つとずしりと重い。

狩人は山に行くとき、これを必ず持つて行くのだそうだ。彼等は山でウサギを追ったり、熊を撃つたりするが、それは大抵早春の堅雪の季節である。雪の中の仕事であるが、状況に応じて、急いで山を駆け登ったり、駆け降りなければならぬ。また、突然の雪崩に襲われることもある。

こうしたとき、カエスキは大きな力を発揮する。まず、急に斜面を下らなければならぬときは、カエスキを股に挟み、これに体重をかけて、ブレイキの役目をさせながら滑り下りる。



カエスキを使った雪遊び「村山郡雪景図絵より」



タカ匠・沓沢朝治氏（故人）の兎狩り

また、突然の雪崩に襲われた時は、逃げる暇とてないから、咄嗟にカエスキを力いっぱい雪に突き刺し、これを両手で支えて、その下手に小さく身をかがめ、足を踏ん張って雪崩の過ぎるを待つ。こうすると、激しい勢いで流れ落ちる雪崩もカエスキに遮られて左右に分かれるので、その下にうずくまっている身体は流されなくて済む。マガギのカエスキが武骨に頑丈に作られるのは、このためだという。

これほど注意しても、なお流される事がある。この場合は、力の限り手足をばたつかせて、周りにできるだけの空間を作ることが肝心である。柔らかない雪でもすぐに固まり、中に閉じ込められた人は身動きはもろろん、呼吸すらできなくなる。雪の間・間にわずかも空間があれば、雪はしまらず、空気が確保できるので生き残る公算が大になるといえる。とは言っても、これは表層雪崩に限る事で

あって、底雪崩の場合はどうにも仕様がなない。マガギのカエスキはさまざまな用途に使われる。その一つは、鉄砲を撃つときの支えにすることである。雪の上にカエスキを突き立て、柄の頂点に鉄砲を据え、狙いを定めれば百発百中という。この用い方は、岩手県沢内村でも同じである。銃身の落ち着きを良くするために柄の頂点に凹みをもたせることもある。このほか、雪の中を歩く時の杖にしたたり、雪の深さや堅さを測ったり、雪を掘るのにも用いる。

兎狩りにもカエスキは欠かせない道具である。兎を狩るには、罾で獲る方法、タカを飛ばして狩る方法など、さまざまな猟法があるが、古い猟法の一つに三、四十センチに切った棒（ベイとかバイという）をウサギの後ろから投げ飛ばして獲る方法がある。ウサギは、バイが風を切る音をタカの羽音と錯覚して、慌てて木の根元や茂みの雪の穴にもぐり込む。狩人は大急ぎで駆けつけ、カエスキで穴の入口を塞ぐ。次にカエスキを穴の周辺に突き立て、兎のありかを確かめ、強く叩いてウサギを獲る。ウサギが穴の反対側の口から逃げ出す時は、その瞬間をとらえてウサギを叩く。

バイの代わりに藁を丸く編んで、木の柄をつけたものを投げつける事もある。これもタカの羽音に似た音がするという。「ワ」とか「ワダ」という。これは非常に古い猟法と言われるが、最上地方ではごく近年まで行われていた猟法で、実際に用いられたワダが現在新庄ふるさと歴史センターに展示されている。

以前、真室川町のタカ匠沓沢朝治さん（故人）のタカを使ったウサギ狩りを見せて貰っ

たことがある。朝治さんは藁・笠に身を固め、右手にカエスキを握り、左手の拳にタカを据えて、一步一步雪の山を登って行く。あたりはなだらかな雪の斜面。このような場所であれば、タカは使えないそうである。頂上に近い所で、タカは急にきつと身構えて、金色の目を鋭く光らせた。ウサギを見つけたのである。すかさず朝治さんは「それっ」と叫んでタカを放つ。タカはすさまじい勢いで真一文字に獲物に襲いかかり、鋭いつめで一気に獲物を抑え込む。ほんの一瞬のことである。

タカはウサギを抑えたまま「ピーピー」と鳴き、主人を呼ぶ。朝治さんは一目散に斜面を駆け下り、カエスキでウサギの頭を強く叩く。次にタカの両脚をつかみ、おもむろに獲物からはなす。

朝治さんは一冬に四百羽もウサギを獲るといふことであつた。タカを飼うことは誰でもできるが、これを使える人はほとんどいない。というのが氏の口癖であつた。

大友 義助

1929年東根市出身、1953年山形大学教育学部卒業、1989年県立新庄南高校校長、新庄市史編纂室勤務を経て、現在、新庄「雪の里情報館」館長。新庄民話の会会長、県文化財保護審議会会長、山形県史編集委員。

（主な著書）

「新庄の昔ばなし」「山形県最上地方の伝説」「新庄市史 第二巻・第三巻」

CD「やまがたの方言」ほか多数

（雪の里情報館）

〒996-0086 新庄市石川町4-15

http://www.ic-net.or.jp/home/shinjo/

E-mail:yukisato@ic-net.or.jp